

デジャヴュと記憶

— バルクソンと現代の記憶哲学 —

平 井 靖 史*
原 健 一**
ド ニ ・ ペ ラ ン***

1. はじめに

昨今、分析哲学において記憶をめぐる議論が急速に発展している。他方で、記憶についてのバルクソンの議論は、現代の論争地図から見ても特異な立場をとっており、その位置付け直しと再評価が求められている。争点は複数あるが、なかでも「デジャ」経験〔déjàは「既に」を意味するフランス語。下位区分を以下で示す〕についての彼の学説は、実証的な先行研究を踏まえたうえで彼の記憶論に固有な論点を示す点で、とくに興味深い。

一九〇八年の論文「現在の記憶と偽再認」¹においてバルクソンが示した既視^{デジャヴュ}(déjà-vu)と既体験^{デジャヴュエキユ}(déjà-vécu)の区別²は、この問題にアプローチする上で

* 福岡大学人文学部教授

** 北海道大学高等教育推進機構オープンエデュケーションセンター科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 博士研究員

*** ゲルノーブル大学記憶の哲学センター・哲学研究所教授

¹ このテキストへの参照は、収録論集『精神のエネルギー』(L'énergie spirituelle, puf. 1919)の略号ESに続く頁数によって、また『物質と記憶』への参照は、略号MMを用い同様に指示した。邦訳としては、前者は原章二訳(平凡社ライブラリー)、後者は杉山直樹訳(講談社学術文庫)を参照した。

² それぞれ英語に直訳すれば already-seen, already-lived となる。以下本稿では、déjà-vu を「既視」、déjà-vécu および déjà-vécu expérience を「既体験」と訳した。バルクソンの仏語テキストではわざわざ鉤括弧付きで対比して、「われわれは単に « déjà-vu »

最初になされるべき必須の区別であり、新たな病理学的発見を経て現在でも広く共有されている。既体験とは、単に「見たことがあるような気がする」場所や風景についての曖昧な既視感や既知感ではない。過去に経験したことがないはずと明確に自覚しているながら、まったく同一の状況で同一の言動が再現されるように感じる、きわめて奇異な現象であり、それは経験する当人に唯一無二の現象的質感とともに強く印象づけられる。それが既体験である。

既体験に関するベルクソン自身の説は、現在の哲学的・科学的知見からどのように評価されうるだろうか。こうした観点から、2021年9月12日、フランス・グルノーブル大学の記憶の哲学センター（CPM）および同哲学研究所（IPhiG）に所属するドニ・ペラン氏を招き、ワークショップを開催した³。当日は、まずペラン氏からの提題があり、それを受けて順に原と平井が応答し、最後に討論を行った。本稿では以下2、3、4節にこの順で掲載する⁴が、最後の討論については紙幅の都合で掲載を見送った。応答に対するペラン氏からの再応答のいくつかは注に含まれているので参照されたい。

を前にしているのではない、これはそれ以上のものだ。われわれが遭遇しているものは「*déjà-vécu*」に属している」（ES, 116）と陳述しているにもかかわらず、残念ながら既刊のいくつかの翻訳では二つの鍵語は区別されておらず、日本語の読者にはこの区別が見えにくいという事情がある。当時、一般には「偽再認」（*fausse reconnaissance*）や「偽記憶」（Guyau, 1890）という表現も用いられていた。「デジャヴュ」という語によって既体験を指す場合もあり、指示対象レベルでの既体験と既視との曖昧な混同は、現在でもなお付き纏う厄介な問題である。

³ イベントは PBJ（Project Bergson in Japan）とベルクソン哲学研究会が主催し、日仏哲学会と共催した。なお、以下の報告のうち平井の担当した部分には科学研究費補助金・基盤研究（B）（一般）（課題番号 19H01190）、福岡大学推奨研究プロジェクト（課題番号 197002）、同領域別研究チーム（課題番号 203004）の成果が、原の担当した部分には科学研究費基金・若手研究（課題番号 21K12818）「ベルクソンの記憶の行為論の研究：哲学と科学の協働による記憶研究の基盤構築」の成果が含まれる。記して感謝いたします。

⁴ ペラン氏のパートはこのイベントのために作成された作業段階の原稿である点に留意されたい。翻訳は基本的に原が行い、必要な箇所について平井がチェックした。

2. 既体験にかんする新ベルクソン主義的見解（ペラン）

2-1. 序論

2-1-1. 私たちは次のようなことを経験することがある。すなわち、自分の人生がそのまま繰り返されている——自分が出会ったもの（場所、人、物など）に見覚えがあるように感じられ、経験エピソードが再体験されているように思われる——のだが、他方で、この繰り返しは見かけ上のものに過ぎないと深く納得してもいるといった経験である。例えば、海外である場所に到着し、一度もそこに行ったことがないとわかっていて、だがそれにもかかわらず、過去に自分がそこに行ったことがあるような気がするといったことである。このような体験は「デジャ」経験と一般に呼ばれ、記憶の妄想として概念化されている。以下は報告の一例である。「私は何かを経験し直している。……今起きていることはまるで私にすでに起こったことのようにであり、私が今まさに生きている最中にあるものはまるで古い記憶であるかのように思われるのだ。」(Vignal et al., 2007 : 92 からの引用)

実に興味深いこの記憶の不具合はこれまで主に認知神経心理学で研究されてきたものであり、哲学者でこれについて書いた人はほとんどいなかった⁵。しかし、デジャ経験は多くの興味深い哲学的な問題を提起する。本報告で私が取り組むのは存在論的な問題、すなわち、上記の経験の一種である既体験の本性をめぐる未解決の問題である。この問題に取り組むに当たって、さらなる議論には足を踏み入れずに私は次のような方法論的立場を支持したい。すなわち、デジャ経験を十分に説明するには、認知神経心理学が記憶について私たちに教えてくれることを考慮するべきであるという方法論的な立場である (Moulin, 2018, p.45-46)。つまり、実験によって根拠づけられた説明を私は提供するつもりである。具体的には、既体験 (déjà-vécu) と既視 (déjà-vu) の区別の科

⁵ 私の知る限りでの例外は Bergson, 1908 ; Gerrans, 2014 ; Micali, 2018 である。

学的な正当性については比較的広いコンセンサスが得られているという理由に基づいて (Moulin et al., 2005, O'Connor et al., 2010, Illman et al., 2012)、既体験が既視とは異なる特異な経験であるのはどのような点においてなのかという問題に取り組むつもりである。

先に述べたように、既視について書いた哲学者はひじょうに少ない。ベルクソンはその一人である。彼はこのテーマに捧げられた長めの興味深い論文「現在の記憶と偽再認」を1908年に発表した。この論文の関心事を踏まえつつ、以下ではまずベルクソンの見解を批判的に論じる。次いで、その批判的な議論に基づいて、私が支持する**能力説** (ability view) を紹介する。以下が私の議論の全体像である。一方で既体験には想起が関与しており、他方で既視にはただの馴染みの感じだけが関与しているのだから、既体験と既視は明確に区別されるべきであるというベルクソンのこの考えに私は同意する。しかし、既体験に**現在の** (actual) 記憶⁶が関与していると述べるベルクソンの見解には私は同意しない。その代わりに、このような経験に伴う感じは、同一のエピソードの他の時点における生起を思い出すことができるという感じ——いわゆる**エピソード的既知感** (episodic feeling of knowing) ——であると論ずるつもりである。以上のように私は新ベルクソン主義的な見解について論じようと思う。

2-1-2. 先に進む前に、もう一つの重要な方法論的ポイントを明記させてもらおう。現象内容——心的な生の経験的次元——はあてにならないものものだ。現象内容を研究するために主に主観的な報告に頼らざるを得ないということがそれをいっそうあてにならないものになっている。そこで私は、自らの提示する議論の確固たる根拠を得るべく、これまでできるだけ多くの報告を頼りにするようになってきた。既視に関する論文で紹介されている数多くの例に加え、N.

⁶ 訳註：actuelについては、可能性と対比される文脈では「現実的」、ベルクソン固有の「現在の記憶」(souvenir du présent) を指す場合には「現在の」と訳した。

Illman の博士論文のデータや C. Moulin の集めた未発表のデータ一式も用いてきた⁷。以下は、これらのさまざまな情報源からとってきた例のいくつかである（ただし、より体系的に掘り起こした報告が必要とされるであろう）。

一瞬、個々人が画面上に形作っている幾何学模様がとても馴染み深いものと感じられていることに私は気がつきました。その瞬間、この感覚は、私が見つめているものだけについての感覚ではなく、自分で経験しているすべてのものについての感覚となったのです。一緒にいた仲間、自分が座っていた位置、自分と周りのすべてのものとの正確な距離。そうしたすべてが、以前に経験したことがあるはずだと感じられるある瞬間と瓜二つのコピー（*a carbon copy*）のように思えたのです。（Foer, 2005）

私たちは誰でもある感じを経験したことがある。それは突如としてわれわれを襲う。自分が話していることや行なっていることが以前 [現在の場面は、現在のものとして意識され、見て取られており、このことに混乱はなく、生起の区別ははっきりとしている]、遠い昔に、話したこと、行なわれたことであるという感じである——朧気ではあるがずっと以前に、同じ顔ぶれ、対象、状況に自分が囲まれていたという感じ——まるで突然思い出したかのように、次に何が述べられるのか完全にわかってしまうといった感じである！（ディケンズ, *David Copperfield*, chapter 39, 1850 : 236)

誰もが経験したことがあると思われる不思議な体験がある——それは、現在の瞬間を完全にそのままに以前に経験したことがあるという感じであ

⁷ 平井靖史が私に示してくれた別の興味深い情報源に Bernard-Leroy の『偽再認の錯覚』（Felix Alcan, 1898）がある。

る [生起は区別されているが、経験は同一である]——私たちが話してゐたのは、まさしくこのことであり、外ならぬこの場所においてであり、まさしくこの人たちに対してであった、等々。(James, 1890 : 675)

私は何かを再体験している.....まるで今起こっていることがすでに私に起こったことであるかのようにであり、私が今まさに生きてる物事が古い記憶であるかのようにである。(Vignal et al., 2007, 92 が引用した報告)

時として得られるこの奇妙な感覚を誰もが知っている。その瞬間の自分の人生が二重に存在しており、以前にその瞬間を体験したことがあるし、またその瞬間を再び体験しているにちがいないという奇妙な感覚である。(Hardy, *A Pair of Blue Eyes*, 1873)

私が読んできた多くの報告書から浮かび上がってくる既体験の核心にある現象内容は以下のものである。すなわち、「自分がそれを以前に体験したことがあった／自分が以前にそこにいたと感じられ、そして、それをまったく同じようなしかたで再体験している」というものだ。例えば被験者はこう述べる。「あの数秒間にあったすべての物事が以前に起こったことのように感じられた」、「それが以前に起こったことのように感じられた」と。報告されている議論と既体験の核心にある現象内容を関連させると、その現象内容が生じる場合——これは既体験において常に生じることではないのだが——現在の想起が〔既体験に〕付加されるのは——しばしば「回想における作話 (recollective confabulation)」としてであって——経験の構成部分としてではない。さらに、知覚と想起の混同は報告されていない。てんかんの患者でも、回想モードで知覚内容が意識されているといった奇妙な精神状態にあるみたいだったとは言わない。したがって、仮に報告が信頼できるものであるとすれば、既体験におい

では、過去の記憶（という通常のもの）と現在の記憶（という奇妙なもの）のいずれも（ベルクソンの見解とは異なって）厳密には関与していないことになる。以上の考えを通じて私が詳細に検討するようになったのが、想起に基づいてはいるが、ベルクソンとは異なる〔既体験の〕説明、すなわち能力説である。だが、まずはベルクソンの考えを説明することから始めよう。

2-2. ベルクソン説

私の読みでは、ベルクソンが（1908）で提案している既体験の説明は、以下のように再構成することができる⁸。

- ステップ1：二重性の主張：あらゆる知覚経験は、それが生じている間、厳密に類似した記憶イメージによって常に二重化〔複製〕（duplicate / dédoubler）されている。「現在はどの瞬間にもそのほとぼり全体において対称的な二つの線に二重化している（…）私たちの現実の存在は時間の中に繰り広げられるにつれて、そのように潜在的な存在としての鏡像によって二重化する。すなわち、私たちの生のすべての瞬間は二つの面をもつ。それは現実的かつ潜在的であり、知覚の面と記憶の面をもつのだ」（ES, 131-136）。つまり、どのような経験のエピソードにも二つのイメージ、すなわち知覚イメージと（知覚イメージの複製である）記憶イメージが含まれている。
- ステップ2：生への注意の主張：意識は本質的に実践的な機能、すなわち「生への注意（attention à la vie）」の機能を果たしている。そのため意識が焦点を当てているものは現在の行為と知覚である。この主張には二つの重要な帰結がある。一つめの帰結は、この機能を果たすために

⁸ 私が明らかにしたいと思っているのは説明の構造である。したがって、私は各ステップの背景にある動機を十全に示そうとはしていないのであり、このことは私の議論の目的に鑑みて然るべきことと思う。

は緊張とエネルギーが必要であり、そしてベルクソンによれば、このエネルギーが減少すると病的な心理状態が引き起こされるということである。二つめの帰結は、意識の実践的な性質に鑑みると、例えば（今日であればエピソード記憶と呼ばれるであろう）純粹記憶のような、実践にとって重要でないものが、生への注意によって、意識から締め出されるということである。

- ステップ3：弛緩した意識による説明：意識は、エネルギーの減少を被る場合、行動と知覚にのみ集中することをやめ、その結果、記憶のような、行為にとって重要ではないものに目を向けられるようになる。これこそが既体験において起こっていることである。具体的には、エネルギーの減少により、常に知覚を二重化している記憶イメージの方に意識が向くようになる。そうすると、進行中の知覚の内容は同じままでも、それが記憶イメージを通じて意識されるようになるのだ。ベルクソンは次のように言っている。「人類の注意の低下は必ずや病的または異常事態となってあらわれるだろう。／偽再認はそうした異常事態の一つである。それは生活への全体的な注意が一時的に弱まったことに由来する。そのとき意識の目的は自然な方向へ向けられず、見ても何の利益もないものを見るようにそらされる」(ES, 146-7)。

以下では、ステップ1（既体験に關与している付加的な記憶イメージがあるという考え）とステップ3（既体験に特徴的な意識のモードは回想モードであるという考え）について主に議論する。

2-3. ベルクソンの説についての議論

本節では、ベルクソンの説にかんする批判的な議論を提示する。

2-3-1. 以下は私がベルクソンの考えに同意する三つの点である。

1) 既体験の特殊性：既体験は既視とは大きく異なる。そのため、既視と同じしたかたで既体験を説明すること——**馴染みの感じ** (feeling of familiarity) に由来する経験という点からの説明がほとんどだ——は誤りである⁹。また私はベルクソンの考えから自然に導かれる次の主張にも同意する。すなわち、既体験は——この主張の詳細を論じるベルクソンのやり方には異論があるとはいえ（後述）——**想起**に基づくものであるということ、それに対して、既視は馴染みの感じに基づくものであるということである。先に述べたように、能力説（以下で紹介する）は想起と馴染みの感覚は異なるものであるということを主張する（後述）。

この点にかんするベルクソンの説明はデジャ経験にかんする現在の認知神経心理学によって強く支持されていることに着目しよう。Moulin (2018) が主張するように、デジャ経験は記憶力の不具合である以上、デジャ経験を説明するためには、後者〔＝認知神経心理学〕の理論武装した説明に訴えて、記憶のさまざまな形式のあいだに科学が引く線に従ってこれらの経験の種類を区別すべきである。実際、馴染みの感じに基づく記憶と、回想（ないし想起）に基づく記憶という二つの再認記憶の形式を区別する必要があるということについては、認知神経心理学のなかで幅広いコンセンサスが得られている (Yonelinas, 2002)。このことは、同じくデジャ経験においても二つの形態があるとみなすことの妥当性を示唆している。

2) 反復の概念（「デジャ」）：既体験において、被験者は、自分自身の過去に起こった経験のうちの一つと全く同じ経験エピソードの反復を体験しているという印象を持つ。言い換えれば、被験者がもつ印象は、現在の経験とたんに似

⁹ 馴染みの感じに基づいた見解については、Brown (2003) と Neppe (1983) を参照されたい。

ているだけの経験エピソードを体験しているといったものでも、過去に起こったものとして経験エピソードを体験しているといったものでもないのだ。以下の区別がこの重要な点を明示することに資するだろう。概念上、経験エピソードの数的な同一性と、そのエピソードの生起 (occurrence) [出来事の例化のこと]の数的な同一性は区別されうる¹⁰。実際、数的に同一の経験エピソードであっても生起が異なるということがありうる。既体験と回想を区別する一つのやり方は、回想においては、再体験されることになるのが、まさに同じ経験エピソードであるだけではなく、(過去における) まさに同じ生起でもあるが、前者においてはそうではないという点である。例えば、10歳の誕生日にケーキのろうそくに息を吹きかけたことを私が思い出している場合、私は過去への精神的な回帰を経験して、単にこの同じ経験エピソードを再-経験 (re-experience) するだけでなく、当該の経験エピソードの過去における生起も再-経験することになる。これに対して、既体験においては、自分が現在において、現在の光景を知覚しているということについての混乱はない。例えば、レストランのテーブルに座っている時に、目下の光景をすでに体験したことがあるという感じを私があったとしよう。この場合、私は、文字通りの意味で時間旅行したという感じ、つまり当該の光景の過去における生起に物理的に立ち戻っているかのような感じを持ってはいない。

同じことを示すもう一つ別のやり方として二つの反復概念を区別することがある。以下を区別しよう。

- i) 強い反復：エピソードが同一であり、かつ生起も同一である。
- ii) 弱い反復：エピソードは同一だが、生起は異なる。

¹⁰ 問題の同一性は単に質的なものでもよいのではと反論する人もいるかもしれない。しかし、被験者が経験エピソードを再体験していると述べる際にそのようなことを言い表してはいないように思われる。被験者は、自分たちがすでに経験した内容の数的に異なる厳密な複製に言及してなどいない。

既体験に伴うのはii)であって、i)ではない。私の考えが正しければ、被験者の報告に出てくることのある「再体験（reliving）」という言葉が意味しているのは、まさにこちらの反復概念 [= ii] である。また、そうではなく、仮に既体験に伴っているものがi)であるとすれば、既体験とは、ベルクソンが主張したように、知覚された内容に記憶的な態度／モードが適用されていることに存する、（あるいは）知覚された内容が記憶の内容として意識されていることに存する、ということになる。

ここで重要なことが二つある。第一に、上記の〔認知神経心理学の既体験についての〕報告は、経験エピソードが同一で生起は異なるということ軌を一にしている。これらの報告は、記憶的な意識モードが知覚された内容に適用されてしまっているといった「矛盾した」心的状態が〔既体験に〕あるという考えを支持するものではない。特にオコナーの報告がこの点について述べているようなことが興味深い。「以前に経験したことがあるにちがいないと私が感じたある瞬間の瓜二つのコピーにすべてが思っていた。」（強調は私による）〔経験〕したことがあるにちがいないと私が感じた…』というフレーズが意味しているのは明らかに次のことである。すなわち、同一の経験エピソード——この経験エピソードは現に生じているものである——の過去の異なる時点における生起は、現在の記憶（という矛盾したもの）を通じて獲得されているものとして意識されているのではなく、周辺的で、かつただ獲得可能なだけのものとして意識されているということである。第二に、私が今しがた導入した区別を行なう余地がベルクソンにないということに着目しよう。すでに示唆したように、ベルクソンが支持しているように思われるのは次の考えである。すなわち、既体験において私たちは現在の光景を記憶的に意識しているということ。言い換えれば、まるで私たちは、過去の経験エピソードの現在における別の生起を再体験しているだけでなく、過去の生起それ自体を再体験しているかのようだ、ということである（以下にあるベルクソンの形相と質料の区別を

参照されたい [14 頁])。

3) 予知の特徴：既体験において、被験者は、現在経験している状況で次に何が起こるかを言い当てることができるという直感 (gut feeling) を持つ。ベルクソンはこの特徴にこだわり、想起が何らかの形で既体験に関与していることがその原因であると主張する。その理論的根拠は「覚えているから次に何が起こるか言い当てることができる」というものである。本稿ではこの点について深めることはないが、能力説もこの点には同意する。

2-3-2. 以下はベルクソンの見解に反して私が掲げる三つの批判点である。

1) 一貫性の問題：ベルクソンによれば、目下生じている現在の経験を複製した記憶イメージについての意識から既体験は成る。しかし、ここから一貫性の問題が生じる。ベルクソンは『物質と記憶』(第3章)において次のように述べる。すなわち、記憶イメージの過去性という特徴は、それらのイメージが過去から戻って来たという事実によるものであり、潜在性という存在論的な身分から現実性という存在論的な身分のものへと当該のイメージの様相が移行したことから [過去から戻って来るという] この運動は成ると。しかし、記憶イメージが既体験に関与している限りでは、その記憶イメージは過去から戻って来たものではなくて現在から生じたものである。そうである以上、その記憶イメージはまったくもって現在的なものであるはずだ。したがって、既体験に過去の特徴がある理由が理解しがたい。言い換えれば、当該のイメージが、例えば無時制あるいは現在時制のイメージ、ないし想像のイメージとしてではなく、記憶イメージとして意識されるべき理由を理解するのは難しいと思われる。

ベルクソンならば次のように反論できよう。すなわち、記憶イメージは、たとえそれが現在の経験の複製として形成されている場合においてさえ、潜在的であると。しかしこれは、想起する時に潜在的なイメージが現実的なものに

なっているという彼の主張と折り合わない。もっと一般的な懸念としては、記憶イメージが形成されるときにも記憶イメージには幾分かの潜在性があるとベルクソンが執拗に主張したとしても、彼はさらに次のことを説明することを余儀なくされる。すなわち、イメージの潜在性に過去との特権的な関係があるのはなぜなのかということ、とりわけ当該のイメージの形成が過去からの回帰によるのではない場合におけるその理由を説明しなければならないだろう。

2) 現象内容の問題：ベルクソンの説明からはさらに二つの困難が生じる。まず思い出されるのは、ベルクソンの説明においては、既体験には二つのイメージが関与していると想定されていることだ。既体験では生への注意が緩み、その結果、意識が記憶の方を向いてしまう。しかし、そうだとしたら、被験者は、少なくとも知覚的なイメージから記憶的なイメージへと移行する際には、二つのイメージを経験するはずであり、それに応じて、既体験には二重の現象内容が伴うはずである。しかし、被験者の報告にはそのような特徴は見いだされない。その代わりに、自分が置かれている一つの状況を再体験していると彼らは述べるのであり、自分の経験に二重のイメージがあるとは一切言っていない¹¹。言い換えれば、既体験に固有の反復経験には、経験エピソードの過去における生起と現在における生起という二重の経験が伴ってはいない。

また、仮にこれまでの問題点をすべて脇に置いたとしても、ベルクソンの説明における過去性の概念それ自体にやはり問題があるだろう。二重性の主張によれば、既体験においては、記憶イメージが意識されているのは、記憶イメージが形成されているとき、あるいは形成されたばかりのときである。したがっ

¹¹ このことは、既体験における二重性を一切排除するものではない。平井靖史が的確に指摘してくれたように [4-2 節（平井）。3-2 節（原）も参照]、少なくともいくつかの報告においては、自我の分裂という経験とそれに続いて起こる現実感の喪失という特徴について述べられており、既体験に記憶と知覚の二重性があることは確かだ。しかし、これらの二重性は、私が扱っているイメージの二重性とは異なるものである。

て、そのような経験に関わる具体的な過去性の特徴は、知覚したばかりの出来事を意識するときのような、せいぜい「直前の過去」といった特徴であるはずだ。しかし、これは被験者の報告と一致しない。また、ベルクソン自身が与えている既視についての記述とも一致しない。既体験には確定的な日付はないと彼が主張しているからだ（「直前の過去」とは明らかに確定的な時間的位置を指している）。さらに問題なのは、複製されたとされるイメージを知覚と厳密に同時的なものとしてベルクソンは提示しており、このことが、過去性がどのようにしてイメージに入り込むと想定されているのかを理解することをさらに難しくしている。

3) 「現在の記憶 *souvenir du présent*」として既体験を特徴づけることの問題：彼の説明を踏まえると、既体験を「現在の記憶 *memories of the present*」として特徴づけるようにベルクソンは導かれていることになる。「この状況は奇妙であり、逆説的だ。[...] これは現在の瞬間におけるこの瞬間の記憶である。これは形相において過去に属し、質量において現在に属している。これは現在の記憶である。[...] ではこれは「現在の記憶」なのだろうか。その言葉が発せられないのは、おそらくその表現が矛盾して見えるからであり、記憶が過去の反復としか考えられないからであり、そしてさらには、すべての記憶はそれが再現する知覚よりもあとのものであると思っているからである [...] しかし「現在の記憶」に近いことは言われている。たとえば、現在とどんな距離によっても切り離されない過去について述べられている。」(ES, 137-142) この文章を読むと、ベルクソンは一方で、意識の内容（「質料 *matière*」）は、それが複製している目下の経験エピソードと厳密に同じものであるという意味で、現在のものだと述べ、他方で、意識のモード（「形相 *forme*」）は、記憶イメージが意識の対象になっているという意味で、過去のものであると述べている。総じて、現在のもの（すなわち内容、経験されている状況）が過去として（すなわち記憶モードのもので）意識されている原因は、知覚イメージから記憶イメー

ジへと意識が転換したことであることとなろう。こういうわけで「現在の記憶」という表現が使われているのである。

しかし、この分析には疑問がある。被験者の報告によれば、彼らは確かに、現在の光景を想起されたものとして意識するのだが、それは、知覚の内容が心的な内容に置き換わってしまったという点でしか通常の想起と変わらないという意味ではない。被験者たちが報告するのは、自分たちが知覚している状況が、かつて体験したものとして意識されているということだ。つまり、既体験に想起が何らかのしかたで関与していることはおそらく間違いないのだが、その一方で、それは知覚内容が意識される際のモードという形で関与しているのではない。この重要な点を支持するもう一つの論拠は、(上記の第一の同意点を参照されたい) 被験者は、ある経験エピソードの(過去における)まさにその生起ではなく、当該エピソードの現在における新たな生起を再-経験したと報告しているということである。

整理しよう。私がベルクソンから引き継いだのは、二つの形式のデジャ経験をしっかりとして区別すべきであるということ、そして、既体験には想起が伴うということである。また私は次の記述的な点も支持する。すなわち、これらの経験において経験エピソードを再体験するということは、まったく同じエピソードの新たな生起を経験するという意味であるということ——またこれが、既体験について報告する際に被験者が念頭に置いている「デジャ [既に]」の感覚であるように思われる、という点である。私がベルクソンから引き継がなかったことは、主に、既体験に想起が関与していると言われる際の関与のしかたである。すなわち、第一に、二つのイメージが生じているということ。第二に、記憶モードというものがあり、その記憶モードのもとで現在の知覚の内容が意識されているということ。第三に、結果として、現在の心的状態として想起が既体験に関与しているということである。

2-4. 能力説

一言で言えば、私が支持するのは次の見解である。すなわち、既体験で生じているものは（ベルクソンの述べることとは異なり）イメージではなく感じである。しかも、この感じはメタ認知的な感じである。だが、感じに依拠した（私が見た限りでの）認知神経心理学の説明のすべてにおいて、この感じは現在の心的状態から成るもの——特に想起の現在の心的状態、あるいは心的に時間旅行している感じといったような想起の構成要素——と考えられている。それに対して、能力説は次のように述べることでそれらの説と袂を分かちつ。すなわち、〔既体験に〕関与する感じは、上記の説とは異なり、可能的な心的状態についての感じ、すなわち、現に体験しているまったく同じ経験エピソードの他の時点における生起をエピソードとして想起できるという感じである¹²。

このような考え方は、経験的にも理論的にも正当なものであるという点を強調したい。なるほど、メタ認知的な感じの中には、確信がある感じや誤っている感じ、オートノエティックな〔自分が経験したものであるという〕感じ（the autooetic feeling）といった認知的な達成についての感じがある。しかし、それ以外に認知的な能力についての感じも〔メタ認知的な感じには〕ある¹³。例えば、意味論的既知感（semantic feeling of knowing）〔意味的にわかっているという感じ〕や、学習にまつわる感じベースの判断などがある（Perrin et al., 2020）。つまり、メタ認知的な感じには、現にやっていることではなく、できるこ

¹² 平井靖史による反論〔4-1、第一の質問〕にあったように次のような懸念がありうる。すなわち、可能的であると主張されている記憶は、現在においては想起できないが未来における想起できる何かのことではないのか、という懸念である。しかし、未来においてこうした認知を達成できる能力についての感じは、それに対応する能力を現在もっているということについての感覚でもある。言い換えれば、そのひとつの感じは、自分が未来にそれを想起できるはずだという感じであるが、その理由は、後にこの能力を自分が獲得することになるからというのではなく、この能力をすでにもっていて、その瞬間にはこの能力を発揮できないからというものである。

¹³ 訳註：達成と能力の対比については、原による解説（3-1）を参照されたい。

とという能力にかんする感じがある。また、既知感という能力にかんする感じには二つの形式がある。意味論的な感じ（例えば、今のところ答えを示せてはいない地理の問題に対して答えを出せそうだという直感 (gut feeling)）か、あるいは、エピソード的な感じである（例えば、今のところ思い出せてはいないけれども、エピソードとしてある出来事を思い出すことができそうだという直感）。この後者のカテゴリーの感じは先行研究によく記載されている (Souchay et al., 2007)。このように、想起する能力についての感じが観察されているものとしてある。この考え方は次のような理由によっても正当化されている。すなわち、既体験にかんする能力説の予測は、達成に基づく説明から得られる予測よりも、被験者の報告と整合的だからである。より詳しく説明したい。

2-4-1. 既体験は（ベルクソン説とは異なり）イメージの生起ではなく、^レ感じの生起によるものである。被験者が既体験を得るのは、被験者があるメタ認知的な感じを得て、その感じによって被験者たちが、目下の光景を以前に経験したことのある光景として意識するようになるからである。このオプションの第一の利点は、上記のベルクソンの説明において指摘された難点から逃れることができるということであり、その難点とは、このような経験 [= 既体験] を説明するのに二つのイメージに訴えていることに由来するものである。〔被験者の〕報告が全体として信頼できるものであるとして、既体験においては、知覚に加えて二次的なイメージ [= 記憶イメージ] の意識が生じているという報告はめったにない。第二の利点は、このオプションが、デジャ経験にかんする現在の認知神経心理学の見解と整合的なものであるということであるが、それに従えば、デジャ経験には誤認のメタ認知的な感じが伴っている。しかし、この場合に問題となるのは、それがどのメタ認知的な感じなのかということである。

私が主張するのは、先行研究にある主な見解とは異なり、〔既体験に関与し

ているのは] 馴染みの感じではないということである。既体験と既視ははっきりと区別されるべきであり、一方で前者 [=既体験] には想起に関連するメタ認知的な感じが伴い、他方で後者 [=既視] には馴染みの感覚が伴っていると主張する人々の見解と能力説は一致している (O'Connor, 2010, p. 3-4 and Funkhouser, 1995, vs Brown, 2003)。この区別を支持する主な理由は、馴染みの感覚と想起では、個人的な過去を表象する仕方がはっきりと異なる点にある。1) 概して、馴染みの感覚には、現在のエピソードと数的に同一のエピソードへの指示はもちろんのこと、特定の過去の経験のエピソードへの指示もない (「この物に私はすでに遭遇したことがあるが、しかしそれは、異なる経験エピソード、おそらく複数回の経験エピソードにおけるのものであった」と述べて自分の体験を報告できる)。それに対して、想起においては、過去の特定の経験エピソードへの指示がある (「まったく同じ経験エピソードをすでに私は体験したことがある」と述べて自分の体験を報告できる)。2) これに関連して、一方で、馴染みの感覚は (経験エピソードではなく) 遭遇した物についてのものであり、他方で、想起は遭遇した経験エピソードについてのものである。3) さらにこれに関連して、一方で、馴染みの感覚には過去の経験エピソードへの回帰は伴わないが、他方で、想起には心的な時間旅行のようなものがある。結果として、私が与するのは O'Connor ら (2010) の次の主張である。すなわち、既視の本性である馴染みの感覚とは異なる「回想の本性」が既体験にはあるという主張である (p.7)。既体験において私が経験しているのは、ある経験エピソード全体の再体験 (既述の弱い反復) なのだ。しかし、この「再体験」はより正確にはどのように理解されるべきだろうか。

2-4-2. すでに示唆していたように、私の提案は、既体験に関わるメタ認知的な感じはエピソード的既知感 (an *episodic feeling of knowing*: EFOK) であるというものだ。つまり、現在生じており私が知覚している経験エピソードと

まったく同じものの他の時点での生起をエピソードとして想起できるという直感である。したがって、「再体験」というのは、この同じ経験エピソードの別の時点における生起を経験していることを意味する。認知神経心理学における最新の先行研究の三つの論点がここでは重要である。

まず、既体験に関する現存の先行研究によれば、既体験とは、現在の光景の知覚に伴う「回想の経験」と、その光景は過去にすでに体験されたものであるという事実に基づいたこの経験の解釈の結果から得られるものである（Moulin et al., 2005）。「想起の経験」ということで Moulin らが意味しているのは、エピソード想起に独特の現象内容（これは Tulving（1985）によって「オートノエシス（*auto-noesis*）」〔かつて自分が経験したという感じを表す〕や「心的時間旅行（*mental time travel*）」と名づけられている）や、エピソードに伴うさまざまな文脈的なディテールのことである。ただし、この説は一部問題を含む。厳密に言えば、もし回想の経験が既体験において生じているようなものであるとすれば、知覚の内容がエピソード記憶の内容として意識されることになるだろう。例えば、知覚内容は、想起の場合とまさしく同じように、過去に位置するもの、心的時間旅行によって得られるものとして意識されることとなる。また、意識されるシーンがそうである〔＝過去に位置するもの、心的時間旅行によって得られるものとして意識される〕のも、エピソード想起の場合とまさしく同じように、ある経験エピソードの過去における生起としてであり、まったく同じこのエピソードの別の時点における生起としてではないだろう。だが、これは被験者の報告とは異なる。すなわち、被験者たちは知覚されたシーンが過去に位置するとは感じておらず、（知覚された）シーンの現在の生起は、そのシーンの過去の生起とは数的に異なるものとして被験者たちに意識されているのだ。

先行研究の第二の論点がここで重要になる。先にも述べたが、何人かの研究者によると、既知の感じはエピソード記憶と特に関係が深いものでありうる。

「エピソード的既知感 (EFOK)」と呼ばれる感じのおかげでエピソードを回想する能力を評価する能力が、私たちのメタ記憶能力の中にあることを Souchay ら (2000, 2007, 2009; Schacter, 1983 も参照) は示している。私の提案は、既体験に伴う類の感じは、オートノエシスのような回想の感じではなく、EFOK であるというものだ。言い換えれば、既体験を経験すると、自分が知覚している光景と全く同じ光景の過去における生起を想起できると直感して、この経験エピソードを以前に自分が体験したことのあるものだと思ひ込むのである。現実にはエピソード想起しているという特有の感じが得られているのではあるまい。

重要な先行研究の第三の論点は、既体験を神経科学によって説明しているものである。O'Connor 他 (2010) は、「検索のシグナル」(the signal of retrieval) と「検索の内容」(the content of retrieval) を区別する。既体験においては、海馬に障害があり、その障害によって「実際の検索がないのに生じている想起の誤シグナル」(p.1) が発生すると O'Connor 他 (2010) は述べる。その結果、知覚されており目下符号化 (encoded) されている光景が、自分が検索している光景として意識されてしまうというわけだ。能力説においては、この検索のシグナルをどう概念化するかに注意しなければならない。経験エピソードが「検索される」ということは、現在の記憶モードが生じていることを意味するのではなく(ここがベルクソンと対立する点である)、被験者が経験エピソードの現在における生起を、同じエピソードの過去における生起とは異なる新たな生起として経験しているということなのだ¹⁴。

2-4-3. この説明は能力説であり、その旨は、達成 (現在のなもの) についての感じではなく、能力 (可能的なもの) についてのメタ認知的な感じに関わる

¹⁴ もっと多くの議論が必要であることは間違いない。平井靖史は、既体験の能力説が、既体験を発動させるメカニズムにかんする説明と整合しうるのかという懸念を提示しているが [4-1、第三の質問]、それに対する答えの少なくとも端緒をこの論点は提供している。

というものである。この説明の利点としては、現実的な記憶の状態を構成するもの——それが記憶イメージであるにせよ（バルクソン）、心的時間旅行であるにせよ（オコナーら）——に訴える説明を悩ませている難点を免れているところにある。現実的な想起エピソードの構成要素には一切訴えず、想起の可能性に訴えることによって、この説明は「現在の記憶」という矛盾した概念を回避しているのだ（Bergson, 1908。ただし Moulin らが「現在の瞬間の回想的な経験」について述べる際に用いられてはいる、2005, p. 1364）。ここでも、被験者はすでに体験したものをもう一度体験していると報告しており、想起モードで知覚内容が意識されているといった矛盾した経験を報告してはいない。想起が既体験に伴うのは、現実的な心的状態としてではなく、得ることが可能な心的状態（a mental state one could have）としてなのである。

注意すべきは、既体験に、想起が現実的な精神状態として関与していると想定すると混乱が生じるということである。実際、みずから現実的な想起と称しているものに関して、正確に言ってその何が既体験において生じているのかを述べる段になると、心理学者たちはきまって言い淀むことになるのはそのためである（「以前の瞬間を前に経験したという誤った印象を支持するための、思考、文脈情報、記憶の再生」、O'Connor ら 2010、p.7-8、および「想起の感覚」p.1、「MTTの感覚」、Moulin, 2018）。同様に、O'Connor 他 2010 は次のように述べてもいる。つまり、既体験には「実際の検索がないのに生じている想起の誤シグナル」（p.1）があるということ、かつ、既体験には「文脈の詳細、また連合する感覚や思考」（p.4、既体験を表現していると思われるディケンズの引用についてのコメント）があるということである。また、O'Connor らは、既視についてのジャクソンの言葉も引用し、次のようにコメントしている。「この文章が描写しているのは、想起とは異なる不完全な心的な出来事で、想起の細部がないのにある状況の「再体験」が伴っている」（p.4）。この引用が示唆しているのは、これとは対照的に、既視体験には上記のもの〔想起の細部〕が

伴うということである。緊張があることは明らかだ。同じように、Moulin (2018) は両方を言っている。「同じように、既視では、時に、現在『繰り返されている』状況の具体的な詳細を想起できそうだと感じられ」(p.45) また、既体験は「想起のようなメカニズムに基づいた過去の強い再体験」(p.47) であるとも述べているのだ。すでに述べたように、私の診断は以下のものだ。すなわち、もしデジャ経験に想起が伴っているとすれば、それは現実的な想起エピソードとして伴っているのだと彼らは想定しており、そうである以上、彼らはいくつもの困難にぶち当たる、という診断である。ただし、このことは、既体験の病理学的な事例によって示されているように、想起の誤シグナルに加えて現実的なエピソードの想起が起こるということを排除しない点には留意されたい(ただしこの場合には、この想起は実際には回想的作話である)。だがやはりこの場合でも、正確にいうなら、現実的なエピソード想起は、あくまでも追加で生じている事態に過ぎないのである。

3. 能力説の解説と二重の現象内容の問題 (原によるリプライ)

以下では、まず、ペランが導入した能力説について概説して、次に、ペランによるベルクソン批判、特に二重の現象内容をめぐる批判に対する応答を提示する。

3-1. 能力説とその背景¹⁵

過去のエピソードを思い出すという経験には、物事を知覚したり想像したりするのは異なる、特有の現象内容が伴う。その構成要素としては次の三つが広く認められている(Perrin, Michaelian & Sant'Anna [2020:p.3])。すなわち、過去性 (pastness)、自己 (self)、そして因果性 (causality) である。例えば、

¹⁵ 本節の記述は Perrin, Michaelian & Sant'Anna [2020:pp. 2-6] と Michaelian & Sutton [2017:3.1 節-3.3 節] を参考にした。

「私は昨日リンゴを食べた」という経験を思い出しているとしよう。この場合、この経験の内容には「昨日」という過去の時点でのエピソードであることが含まれている（過去性）。また、この経験の内容には、この過去のエピソードを自分が経験したという内容が含まれている（自己）。そして、今思い出している経験内容が過去の自分の経験に由来するものであるということが認められている（因果性）。このようなエピソード記憶の現象内容——エピソードを思い出すとはどのようなことか——やその由来を問うのが記憶の哲学の主要な関心事の一つとしてある。

この問いに対しては大きく分けて二つの方向性の応答が提案されてきた。一つは、エピソード想起の現象内容が得られるのは判断（judgment）によってであるというもの、もう一つは、それは感じ（feeling）によってであるというものである。

判断によって想起の現象内容を説明するものは「メタ表象的説明 meta-representational account」と呼ばれる。こちらの説明によれば、想起に特有の現象内容は、想起された経験の内容についての推論や、それを通じて下される判断といった高次の能力を介して与えられる。例えば、エピソード想起の主体は、現に与えられている経験の内容を、自分の過去の一連の経験（物語）の中にも的確に位置づけることによって、当の経験の内容が自分が過去に経験したものであると判断する。この場合、経験の内容それ自体には想起に特有の現象内容は含まれず、経験内容についての判断によって想起の現象内容が与えられることになる。以上のことは、想起の現象内容とは二階の内容（second order content）であるとも言われる（Perrin, Michaelian & Sant’Anna [2020: pp. 2-3]）。

それに対して、「内容の経験による説明 the experience-of-content account」がある。こちらの説明によれば、想起された経験の内容それ自体から想起の現象内容は与えられる。つまり、推論や判断などの高次の能力を媒介せず、その

内容に表れている過去性を直接感じることによって、想起に特有の現象内容が得られる。例えば、ペランが紹介していたタルヴィングの「心的時間旅行説」がそのような説明の一つである。私たちはエピソードを想起する際に、そのエピソードの内容を思い出すだけではなく、その過去のエピソードを経験した時の気持ちや気分もありありと思い出す。心的時間旅行説は、このような個人的な経験を想起する際に伴う過去のエピソードを再体験している感じを想起の現象内容の由来とみなす (Tulving [1985])。以上のことは、想起の現象内容とは一階の内容 (first order content) であるとも言われる (Perrin, Michaelian & Sant'Anna [2020:pp. 3]; Michaelian & Sutton [2017:3.1 節])。

こうした論争状況下で、最近注目されているのが「能力説」である。能力説は、判断 (二階の内容) か感じ (一階の内容) かという大まかな分類に従えば、後者の感じによって想起の現象内容を説明するものである。そして、この過去性の感じの由来として認知の達成ではなく、認知の可能性に訴える点が能力説の特異な点である。

一方で、心的時間旅行説は認知の達成に訴える説である。心的時間旅行をしている感じとは、実際に特定の物事が想起されている際に、言い換えれば、想起が達成されている際に伴う感じである。他方で、能力説は認知の可能性に訴える。例えば、一年前の出来事が思い出せそうで思い出せないといった場合、この「今は思い出せていないけれど、思い出すことができそうだ」という感じが認知の可能性の一つである。この能力説が、今回、ペランが依拠しているものに当たる。

この能力の感じは「エピソード的既知感 (episodic feeling of knowing)」と呼ばれ、エピソード的既知感をめぐってさまざまな説が提示されてきた。例えば、ドキッチュの「二階層説 a two-tiered account」(Dokic [2017]) や、この二階層説への批判に基づいて提示されたペラン、マイケリアン、サンタナによる「統合されたメタ認知的感じに基づく見解 an integrated metacognitive feeling-

based view」(Perrin, Michaelian & Sant'Anna [2020]) などがあり、今後のさまざまな展開が期待される。

3-2. 二重の現象内容批判に対する応答

次に二重の現象内容批判をまとめよう。ペランは次のように述べる。「[…]ベルクソンの説明においては、既体験には〔知覚イメージとその複製である記憶イメージという〕二つのイメージが関与していると想定されている。既体験では生への注意が緩み、その結果、〔ふだんは知覚や行為の方に向いている〕意識が記憶の方を向いてしまう。しかし、そうだとしたら、被験者は、少なくとも知覚的なイメージから記憶的なイメージへと移行する際には、二つのイメージを経験するはずであり、それに応じて、既体験には二重の現象内容が伴うはずである。しかし、被験者の報告にはそのような特徴は見いだされない。その代わりに、自分が置かれている一つの状況を再体験していると彼らは述べるのであり、自分の経験に二重のイメージがあるとは一切言っていない」(13頁)

ペランの解釈によれば、既体験の主体には少なくとも三つの事態が生じているとベルクソンは考えている。まず、(1) 知覚イメージと記憶イメージの二つのイメージを主体がもつこと、(2) 生への注意が緩み意識が記憶モードにあることである。そして、ペランの考察に従えば、(3) これら二つの事態 (1・2) から、知覚イメージと記憶イメージという二種類のものからなる二重の現象内容が生じる。——確かにペランのこの議論には一定の説得力がある。しかし、少なくともベルクソン説への批判としては不十分な点がある。

ペランが挙げている限りでのベルクソンからの引用箇所、上記の解釈・考察を支持すると思われるのは以下である。「現在ほどの瞬間にもそのほとぼしり全体において対称的な二つの線に二重化している […] 私たちの現実の存在は時間の中に繰り広げられるにつれて、そのように潜在的な存在としての鏡像

によって二重化する。すなわち、私たちの生のすべての瞬間は二つの面をもつ。それは現実的かつ潜在的であり、知覚の面と記憶の面をもつのだ。」

確かにベルクソンは経験の二重化についてここで語っている。しかし、注意すべきは、これが異常な経験についての説明ではないという点である。「現在はどの瞬間にも […] 二重化している」「私たちの生のすべての瞬間は二つの面をもつ」とベルクソンは述べており、知覚イメージと記憶イメージの二重化という現象が通常の経験においても常に生じている一般的な事態なのだと述べている。つまり、(1) はベルクソンにとって既体験の経験に特異な事態ではなく、ひいては、二重の現象内容を生じさせる主たる要因でもない。

では、(2) が二重の現象内容を生じさせる主たる要因となるのではないか。だがこれもおそらくベルクソンの考えとは異なる。確かにベルクソンは生への注意の弛緩が意識の記憶モードを生じさせ、そして、意識の記憶モードによって既体験という特異な経験が生じると述べている。しかし、それらが二重の現象内容を生じさせるとは述べていない。そのように述べている箇所は、少なくとも私の読む限りでは見つけることはできなかつたし、また、ペランもそのような決定的な箇所を引用できてはいない。

そして、経験の構成要素が多重であることによって、その経験の現象内容も多重になるとは限らないと一般に言えるように思われる。例えば、網膜像が右目と左目において別々に与えられている場合、視覚経験は二重の構成要素から成る。しかし、だからといって、実際に与えられている視覚的な現象内容が二重化してはいない。もちろん、知覚経験の事例において言えることが既体験についてもそのまま当てはまるとは限らない。とはいえ、経験の構成要素が多重であることによってその経験の現象内容が多重になるとは限らないということは一般に言えるだろう。

より詳細な説明は次の平井による論考も参照されたい。

4. トラベルバックなしのドロバック（平井によるリプライ）

ペラン氏の能力説では、既体験を、該当する記憶はないのに EFOK（エピソード的既知感）が誤作動したものと見る。そこでは、なぜかは知らぬが「想起できそうな感じ」だけが生じているというわけだ。以下では、まずこのペラン氏の説への疑問点を三つ挙げ（4-1）、次にペラン氏からのベルクソン説への批判点に回答を示し（4-2）、第三に、両者の相互補完による「新ベルクソン主義」的見解を提示してみたい（4-3）。

4-1. ペラン氏の能力説への三つの質問

一つ目の疑問は、EFOK について、この概念には二つのよく似てはいるが異なる事態が含まれているのではないかというものである。一方で、この概念を特徴付けるためにペラン氏が参照している Souchay らの文献では、この既知感の中身は、対象をのちにエピソード的に想起できるだろうという感触である。つまりは、その対象の記憶を一定期間保持できる自信がどれくらいあるか、自分の記憶の保持能力についての見積もりを示すものである。

他方で、ペラン氏のシナリオで実際に問題になっている EFOK は、未来ではなく、当該時点で対象をエピソード的に想起できるという感触のことである。こちらも確かに、言葉にすると「エピソード的に想起できる感触」にはなるが、しかし前者とは異なる事態に基づいているように思われる。というのも、これは、目的の記憶が今の自分にとってどれくらい想起できそうか、つまり、どれくらい想起の射程範囲に入っているかの見積もりを示すものであるように思われるからである。

二つ目の疑問は、既体験に伴う不可避性の感じにかかわる。ベルクソンは既体験を、「不定位の過去」¹⁶、「予知できるという感じ（予知感）」、「避け難いとい

¹⁶ 「決して定位されない」（jamais localisé）、「不定の過去」（passé indéterminé）、「過去一般」（passé en général）といった表現が用いられる。

う感じ（不可避感）」の三点で特徴づけている¹⁷。ペラン氏自身の立場でも、前二者については扱われているが、第三の点についてどう説明するのだろうか。なおこの論点は、後述の二重性の擁護可能性（4-2）にも関わる。

三つ目の疑問は、EFOKの原因についてである。ペラン氏は、既体験をEFOKの誤作動によって説明するが、この誤作動が何を条件に、どうして生じるのかという原因については示していないように思われる。他方でベルクソンの方は、潜在的イメージが経験されるという誤作動について、二つのレベルの原因を挙げている（ES, 149；152）。

- a. 「近接原因」（cause prochaine 根底にあるメカニズム）：潜在的イメージは、現在のイメージの後に作られるのではなく、共時的に作られる。
- b. 「発動原因」（cause initiale キュー、トリガー）：意識の弛緩。

これに対応する形で、ペラン説についても以下の二つが求められるはずである。

- a. そもそもEFOKというものは、通常は、いつどのようなタイミングで発動するものなのか（どのようなメカニズムが根底にあるのか）。
- b. どうして既体験の時にはこれが誤って発動させられるのか（誤作動のキューは何か）。

4-2. ベルクソン説の擁護その一（二重性は存在しないか）

次に、ペラン氏からなされたベルクソン説への三つの批判点について応答を

¹⁷ 三つの特徴はそれぞれ、ES, 137、138、139で論じられ、単なる既視現象と区別する目印とされている。続くテキストでは逆順に検証され、不可避性がES, 140-141、予知感と不定過去が順にES, 141で確認されているが、番号が振られていないため対応関係が一見して読み取りにくい。

試みる。

一点目は、「二重のイメージ」についての批判である（原によるリプライ 3-2 も参照）。まず事実として、二重性そのものについての報告はむしろ豊富にある。ベルクソン自身、イエンゼン、クレペリン、ボナテッリ、ザンダー、アンエルなど、自らが専門の心理学者たちである人々の報告を引き、「これらの著者は全員一致で、この現象を…一面では知覚、他面では記憶である二重の現象（*phénomène de dédoublement*）として述べている」（ES, 114）と書いている。重要な体験報告の典拠の一つであるベルナル・ルロワの報告の中にも、以下の観察がみられる。

観察 50、32 番：私の偽再認は、二重性というリアルな感じを伴っています。一方の人物は行為するだけで、もう一方の人物がその行為を見ている […]。この二重性の感じは、感覚の中でのみ存在していて、物質的な観点からは二人の人物は一つでしかありません。（Bernard-Leroy (1898), p. 185-186）

いずれにせよ、こうした数多くの「二重性」についての報告がすべて間違っただけとみなせる根拠がない限りは、既体験の現象的特徴としてこれを無視することはできないだろう。

二重の「イメージ」という点については、原氏のコメントを参照されたい。ベルクソンがイメージという語を用いるのは、被験者の経験内容を記述する水準においてではなく、その二重性を説明する水準においてである。しかも、二つのイメージの内容は単に類似しているのではなく厳密に同一であると言われており、かつそれは経験の中に登場する事物ではなくその経験全体についてのイメージである。とすれば、内容に関しては、当然この二重性は打ち消されてしまうと考えるのが自然だ。

結果として被験者によって経験されるのは、残る違い、つまりイメージの内容ではなく、二つのイメージの与えられ方、「アスペクト」の二重性だ。同じ内容の経験が、通常は排他的であるはずの、**現在のアスペクト（進行形の行為者性）**と**潜在的アスペクト（受動的観察）**の両方のもつとで与えられるという話をベルクソンはしているのである。そしてこのアスペクトの二重性によって、既体験の主要な特徴のうちの二つ、不可避感と予知感が説明される。例えば、一人の人物の経験が、行為と観察という二つの側面に二極化・分断されることで、観察者側に立つ意識は、〈自分の行為であるのにただ見ているだけで手を出せない〉という奇妙な不可避感に囚われることになるわけである（ES, 139）。

4-3. ベルクソン説の擁護その二（時間内定位の間違いか）

ペラン氏は、ベルクソン説では被験者は既体験において時間内定位を間違える（ペラン氏の言い方では、同一過去エピソードというだけでなくその同一の（＝過去時点の）**生起**を生き直す）ことになると考えており、その点で報告にそぐわないと批判している。

しかし既にみた通り、ベルクソンは既体験の現在のアスペクトを否定していない。このことが意味するのは、被験者は状況を、ただしく現在時点に位置付けられたものとして、つまりリアルかつ知覚的なものとして捉えているということだ（その上、後述する理由で、既体験においては過去への時間内定位プロセス自体が発動しない）。ベルクソンの理解においても、既体験を経験する人は、けっして自らが**想起体験**をしている（過去の生起を再体験する）とは思わない。したがって、ペラン氏の指摘は当たらない。

ベルクソンの観点からすれば、既体験を特殊なものたらしめているのは、ペラン氏が示唆するように時間内定位の誤作動ではなく、現在のアスペクトに**加えて潜在的アスペクトもまた経験**されてしまうという点にある。

混乱を避けるため、ここで通常の再認、通常の想起、既体験体験の三者を対比しておこう。再認においては、経験は現在に定位され、現象的な質としては馴染みの感じが経験される。想起においては、経験は過去に定位され、現象的な質として過去性の感じが経験される。既体験においては、経験は現在に定位されるが、現象的な質としては（潜在性アスペクトに由来する）過去性の感じが経験されるのである。

4-4. ベルクソン説の擁護その三（過去性の由来）

ペラン氏は、既体験に過去性が備わるという論点は、ベルクソン自身が『物質と記憶』のテキストで述べていることと矛盾すると指摘している。というのも、そこでは、過去性が想起における記憶の現実化プロセスに由来すると述べられているが、既体験にはこの現実化プロセスはないからである。ベルクソンは以下のように書いている。

本質的に潜在的なものである過去は、それがわれわれに過去として把握されるためには、過去が現在のイマージュへと展開しつつ暗闇から白日のもとに現れてくるその運動を、われわれが身をもってたどるしかないのだ。
(MM, 150[198])

ベルクソンにとって、この「闇から光へと連れ出してきた連続的な進展」(ibid.) という現実化フェーズが、想起に特有の現象的な質としての過去性を特徴づけている。そして、ペラン氏の指摘する通り、たしかにこれは既体験にはみられないものである。

4-4-1. 想起プロセスの三ステップ

だが、想起プロセスは現実化フェーズだけでできているのではない点を見逃

してはならない。私の解釈では、ここには二種類の過去性が含まれている。ベルクソンが与えている記述（MM, 148[196]）を分析すると、それは以下の三つの要素を含んでおり、上述の現実化フェーズはそのうちの後二者からなる。

- (一) **意識モードのシフト**：「現在から離脱してまずは過去一般に身を置き直す」という「ある独特な働き」
- (二) **時間内定位**¹⁸：「続いて過去の一定の領域に身を置き直す」働きで、これは「カメラのピント合わせにも似た、手探りの作業」である。しかし、「記憶はまだ潜在的状態にあり、ここでわれわれは適切な態度をとりながら、それを受け止める用意を整えているに過ぎない」。
- (三) **イメージの現実化**：「徐々に記憶は、凝集する雲のように現れてくる。記憶は潜在的な状態から現在的な状態に移行し、輪郭が形をとり、表面が色彩を帯びてくるにつれて、知覚に似たものになっていく」。

見逃されがちなのは（一）の「意識モードのシフト」という操作である。私たちの日常生活は、基本的に現在的な行動をベースに未来志向で営まれているため、過去の特定の出来事を想起するという作業のためには、まずは基本的な心的態勢のシフトが必要であるとベルクソンは考えている。何かを思い出そうと作業を止めて「ええと…」と立ち止まる、あのステップである。これを彼は「過去一般に身を置き直す」と記述している。ここで「過去一般」というのは、特定の過去に照準を合わせていく手前の段階であるため、過去ではあるがまだ特定の過去に限定されていないという意味である。

¹⁸ ベルクソンでは、いわゆる時間軸上での時点・期間の指定だけでなく、（逆円錐の縦軸である）記憶の諸断面の中での指定もあるが、ここでは合わせて「時間内定位」と称する。

4-4-2. 二種の過去性：トラベルバックとドローバック

想起が実を結び、実際に場面をイメージとして思い出すに至るためには、この後に（二）と（三）のステップからなる**現実化フェーズ**を経る必要がある。この（二）と（三）の現実化フェーズによって、私たちは、ありありと蘇る過去の場面へと連れ戻され、いわゆる「心的時間旅行」（タルヴィング）を経験することになる。私たちが想起経験に特有なものとして味わうあの「思い出しているという感じ（想起感）」としての過去性は、この現実化フェーズに由来するというのは上に確認した通りだ。心の中で過去へと遡る経験に随伴するこの過去性を、区別のため「**トラベルバック過去性**」（traveling back pastness）と呼ぶことにしよう。

翻って、現在の営みから身を引き剥がすステップ（一）もまた、ある重要な意味で、すでに過去性を帯びていると言える。現在の状況に対してせわしなく応答している感覚-運動的ループから、いったん離脱して、まだ見当もついでない潜在的な記憶イメージの闇のうちへと身を投じる動作には、固有の現象的な質感が伴っているだろう。ベルクソンはこの操作を現在のな生のあり方からの「離脱」（se détacher, MM, 148 ; 181 ; 186 ; 190）とか「無関心化・没利害化」（se désintéresser, MM, 171）といった言葉で特徴づけ、夢や精神異常をもこれに結びつけている（MM, 194）。このフェーズにおける過去性を「**ドローバック過去性**」（drawing back pastness）と呼ぶことにする。

私の解釈では、通常の想起と既体験の重要な違いは、トラベルバックの有無にある。通常の想起経験においては、過去から情報を得るために人はいったん現在から退くが（ドローバック）、続いてそこから特定の時点に位置付けられる特定のイメージを持ち帰るべく、現実化プロセスを遂行する（トラベルバック）¹⁹。これに対して既体験においては、通常想起の後半に相当するトラベル

¹⁹ そのため、このトラベルバック過程によって得られる過去性の方がより反省的な色合いを帯びることが予想される。ベルクソンは「われわれによって過去として把握される

バックは存在しないが、ドローバックは起きている（しかも知覚への定位は維持したままで）。この解釈が正しければ、既体験で現在の知覚と二重化して体験されることになる潜在的記憶がもたらす過去性は、このドローバック過去性であり、トラベルバック過去性ではないことになるため、ペラン氏の指摘するテキスト上の衝突は回避される。

4-4-3. 既体験とドローバック過去性

では、既体験における過去性が、トラベルバックではなくドローバックの過去性であることは正当化されるだろうか。私は以下のように正当化されると考えている。

まず、既体験の特徴としてベルクソンが第一に挙げていた「不定位の過去」、つまり「過去一般」である。彼は以下のように論じている。「この過去はどんな過去だろうか。それは日付を持たず、持ち得ないだろう。というのも、それは過去一般に属し、いかなる特定の過去でもあり得ないからである」(ES, 137)。ここでも用いられている「過去一般」は、はっきりと時間内に定位される過去との対比で用いられており、想起プロセスにおいて第一のステップ、つまり意識モードのシフト（ドローバック）を特徴付ける際に用いられていたものにしっかり対応している。

次に、ベルクソンは既体験をトリガーするのが、生への注意の緩み（現在性からの離脱）であると述べており、この点も私の解釈を支持する。ただ現在の生から退きさがるだけで、（時間内定位やイメージ現実化などの）いかなる追加の努力も払わずとも得られるタイプの過去性というものがある²⁰。それがこの

ためには」(pour être saisi, MM, 150[173]) 現実化が必要だと述べているが、それは裏を返せば、それを欠く既体験においては（3節で見たペラン氏の危惧に反して）時間内での過去への定位はなされない（が、ドローバック過去性はある）ことが示唆される。

²⁰ 既体験の場合には、この潜在的な反映イメージの現実化が発動しないのは、一つにはそもそもそのような過去の有効活用という意図のもとに立ち上がったプロセスではない

ドロバック過去性であり、ベルクソンが「潜在性」という状態で名指しているのは、行為者性からの離脱・没利害化をきっかけにアクセス可能になるこのアスペクトだと捉えられる。睡眠時の夢や、覚醒時のマインドワンダリングなど、感覚－運動の緊張の弛緩によって「夢の記憶」の活性化を語るベルクソン説とよく整合する。想起は、この弛緩を意図的に制御することで過去の経験を現在の照明に役立てるといふ芸当を果たすものである。

彼の理論で注目すべきポイントは、こうした場合にアクセスされている記憶全体の中に、直前までの経験だけではなく、現在進行中の経験の記憶もすでに含まれている、という点だ²¹。他の全ての記憶と異なり、この記憶は内容の面では現在の知覚経験と区別されないため、アスペクトの違いのみが際立つ。以下の引用文中の「反映」(reflet) は、現在を同時に二重化する潜在的イメージ、「現在の記憶」のことである。

のちのち通常の機能を果たす時に、この反映は私たちの過去を過去の徴し (marque du passé) を伴って再現するだろう。しかし、そもそも過去の徴しは、この反映というものの本質を成すものである以上、反映は、実はそれが形成されるその瞬間においてすでに、過去の徴しを伴って現れているのである。(強調引用者、ES, 137)

この「過去の徴し」こそが「潜在性」というアスペクト（ドロバック過去性の正体）であり、私たちの経験は、生じた端から知覚と記憶へと二重化され続けるとベルクソンが述べるのは、この意味においてである。

以上を要約すると、以下のような表になる。ペラン氏が適切にも指摘するよう

ということもあるが、他方で、すでに内容的に同一の現在のイメージを手に入れている以上、仮にやろうと思っても現実化する余地がないということも指摘できるかもしれない。
²¹ ペラン氏は既体験に関与するのが「直前の過去」であると想定しているが（14頁）、それはこの点でミスリーディングである。

に、再認の一種に過ぎない**既視**が呈する現象的質は、馴染みの感じ (sentiment de familiarité) でしかない。他方で、**既体験**についてペラン氏は「想起に関与する」と述べているが、私の解釈ではより精確に限定して、潜在性 (とそれに起因するドロバック過去性) に関与すると言える。次に、**想起**と既体験の違いは、後者におけるトラベルバックプロセスの欠如と、現在の知覚とドロバックの共存である。過去への時間内定位は発動せず、かつ、現在の知覚も健在であるため、被験者は自分が現在の状況を経験していることについて正しく把握している。それでありながら、意識の弛緩のゆえにドロバックが発動するために、現在の知覚イメージに加えて潜在的イメージもまた経験されてしまう。内容は同一なので、被験者は、進行中の知覚を前にしたまま、それを完全にカバーする潜在性のアスペクトの現象的質を味わう羽目になるのである。

表 1: 各種経験における時間内定位と現象的な質 (D=ドロバック, T=トラベルバック)

	時間内定位	現象的な質
再認 (既視)	現在	馴染みの感じ
想起	過去	D 過去性 (潜在性) + T 過去性 (現実化)
既体験	現在	D 過去性 (潜在性)

4-5. 新ベルクソン主義的見解 (neo-Bergsonian view) に向けて (両説の統合)

最後に、ペラン説との統合可能性について。ここまで見てきたベルクソン説に、ペラン氏の能力説と矛盾する点は見られない。むしろ、ペラン説において欠けていると見受けられる EFOK の原因 (氏への第三の疑問) について追加の説明を与えるものとして、両者を補完的な形で捉えることができるように思われる。

4-5-1. 潜在的イメージに基づく EFOK 解釈

まず、ドロバック過去性は、過去へと時間的に定位されていない記憶に

よって定義されている。これはEFOKの議論ときわめてよく整合する。なぜなら、EFOKは〈問題の記憶がまだ特定されていない状況〉において、どれだけ思い出せそうとを感じるかを示すものであるからだ²²。

ただし、ペラン氏の描像においては、EFOKは誤作動の理由が示されていなかった。つまり、既体験において、ほんとうは該当する記憶はないにもかかわらず、なぜかは知らぬが「想起できそうな感じ」だけが発動するというのだ。そのメカニズム的な原因の説明が欠如している点について疑問としてすでに挙げた（4-1、第三の質問）。

他方で、もしベルクソンの立場と統合するならば、このEFOKの発動は根拠づけられることになる。その理由は以下である。

まず、通常の場合でのEFOKを考えてみよう。目的の記憶を今思い出せそうかどうかという想起可能性の見積もりのことだ。その見積もりを得るためには、通常の場合でも、想起プロセスのステップ（一）であるドローバックまでは発動させている可能性がある。実際に具体的な内容を思い出すまでに至らないとはいえ、現在の行動を忙しく繰り返しているただなかでこの見積もりを出すのは難しいように思われまいだろうか。私たちは一旦手を止めて、目的の記憶が思い出せそうか、それとも到底思い出せそうもないかを評価しているのではないか。そして既体験の場合にも、ベルクソンの立場では、このドローバックが生じている。そうすると、EFOKがターゲットにしている記憶は、通常の場合と既体験の場合のいずれでもちゃんと存在しており、かつ意識の射程範囲に入っている。つまり、既体験における「想起できそうな感じ」は、誤作動ではなくある意味で「正しい」感じとなるのである²³。

ペラン氏にとって好都合な（と思われる）ことに、説に欠けていると思われる「近接原因（根底にあるメカニズム）」と「発動原因（キュー）」を提供して

²² さらに既体験と関連づけられることのある離人症とも整合するかもしれない。

²³ しかし、すでに上の注20で触れたように、別な理由で想起プロセスは実現しないが。

いる。ベルクソンによれば、現在の知覚と同一内容の記憶（潜在的イメージ）は、既体験の場合に限らず、私たちが何かを経験する場合には常に同時に成立しているのだが、生への注意という、一種の有用性フィルターによって検閲されて意識に前景化しない（EFOK も発動しない）。だが逆にその注意が何らかの事情で弛緩するならば、この潜在的イメージが EFOK という形で顕になるという次第である。誤作動は EFOK ではなく、EFOK を抑制する仕組みの方にあることになる。

4-5-2. 「現在の記憶」は「矛盾した」仮説か？

ペラン氏は、ベルクソンの「現在の記憶」のテーゼについて、繰り返し「矛盾した」(contradictory) という形容を施し (11、14、21 頁)、直観的な違和感を表明している。確かに、現在の知覚が生じると同時に、同一内容の記憶が潜在的イメージとして成立するという彼の主張は、一見して奇妙な印象を与えるものである。だが、その実質的内容を検討した上でなお、そうした印象は維持されるだろうか。

ベルクソンの議論の文脈を辿ると、結局彼のテーゼが述べている正味の内幕は、以下のことになるように思われる。

存続テーゼ：何であれ何かが時間を通じて存続するためには、当の存続するものは、それが現に生起したその瞬間から存続し始めていなければならない。「後から」ではダメである。もし、しばし後から存続し始めるとするならば、結局、その「しばし後」までの存続を追加で説明する羽目に陥るだけだから。

この存続テーゼ自体に、論理的におかしな点はないように思われる。人が困惑するのは、ベルクソンによる「記憶」という語の用法のほうかもしれない。

彼が「記憶」(souvenir) という語によって指しているのは「私たちの経験において時間を通じて存続するもの」のことである。そしてこの用法と、上の存続テーゼの組み合わせから、知覚と記憶の共時的二重化という彼の説は、単純に帰結する。

現在の・現勢的 (actuel) / 潜在的 (virtuel) の特徴づけはここに重ねられている。ベルクソンは現勢的という用語で、〈進行形における活動〉を指している。万人が認める通り知覚は流れる現在の中で絶えず変化しており、その意味で現勢的だ。それとの対比で、上述の意味での記憶、つまり「存続するもの」は自動的に潜在的ということになる。あとは存続テーゼにより、この潜在的記憶は、現勢的知覚と同時に成立することが導かれる。だからベルクソンは、何か矛盾めいた存在を現実に新たに追加しているというわけではなく、ただ現実を概念的にスライズする仕方が普通とは違うだけだと考えるのが適切であると思われる²⁴。

4-5-3. まとめ

ペランの能力説とベルクソンの二重性説を統合した「新ベルクソン主義的見解」では、既体験の以下の諸特徴が説明される。

1. 現在時点への**正しい時間内定位**…経験の潜在的アスペクトに意識が向かうが、引き続き知覚という現勢的アスペクトも作動し、なおかつ過去への時間的**定位作業**は妨げられるため。
2. **不定の過去の感じ** (すでに体験したという感じ)…潜在的アスペクトにもアクセスされているため、経験はドローバック過去性を伴う。意識モードのシフトの誤作動による。

²⁴ そして、このような時間論的なフレームで現在と記憶の関係を再定式化することにより、時間論のみならず認識論、心身問題、自由など、他の多くの論点で連鎖的に問題が立て直されることになる。

3. 想起できそうという感じ…ターゲット記憶が実際に射程範囲にあるため EFOK が発動する。ただし実際には想起プロセスは発動しない。
4. 自己が二重化されているという感じ(予知感と不可避感)…一方が活動的、他方が観察的²⁵ であるような二つのアスペクトが分断されたまま同時に察知されるため。

参考文献

- Bergson, H. (1896). *Matière et mémoire*. Paris: Félix Alcan.
- Bergson, H. (1919). Le souvenir du present et la fausse reconnaissance (1908), in *L'énergie spirituelle. Essais et conférences*. Paris: Félix Alcan.
- Bernard-Leroy, E. (1898). *L'illusion de la fausse reconnaissance*. Paris: Félix Alcan.
- Brown, A. S. (2003). A review of the Déjà Vu Experience. *Psychological Bulletin*, 129 (3), 394-413.
- Dokic, J. (2014) "Feeling the past: a two-tiered account of episodic memory", in *The Review of Philosophy and Psychology*, Vol. 5, pp. 413-426.
- Foer, J. (2005) "The Psychology of Déjà Vu", *Discover Magazine* (<https://www.discovermagazine.com/mind/the-psychology-of-deja-vu>), 最終閲覧日：2022年1月17日.
- Funkhouser, A. (1995). Three types of déjà vu. *Mental Science Network*, 57, 20-22.
- Gerrans, P. (2014). Pathologies of hyperfamiliarity in dreams, delusions and déjà vu. *Frontiers in psychology*, vol. 5, 2014, 1-10.
- Illman, N., Butler, C., Souchay, C., Moulin, C. J. A. (2012). Déjà Experiences in Temporal Lobe Epilepsy. *Epilepsy Research and Treatment*, vol. 12, 1-15
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Micali, S. (2018). The Anticipation of the Present: Phenomenology of déjà vu. *Journal*

²⁵ この観察がタイプのてしかなければ再認になるため、これはトークンのな強い予知感・不可避感をもたらす。

- of the British Society for Phenomenology*. 49: 2, 156-170.
- Michaelian, K. & Sutton, J. (2017) "Memory", in *Stanford Encyclopedia of Philosophy* (<https://plato.stanford.edu/entries/memory/>), 最終閲覧日: 2021年12月20日.
- Moulin, C. (2018). *The Cognitive Neuropsychology of Déjà Vu*, Oxon: Routledge.
- Moulin, C. J. A., Conway, M. A., Thompson, R. G., James, N., Jones, R. W. (2005).
- Neppe, V. M. (1983). *The psychology of déjà vu: have I been there before?* Johannesburg, South Africa: Witwatersrand University Press.
- O'Connor, A. R., Lever, C., & Moulin, C. J. A. (2010). Novel insights into false recollection: A model of déjà vécu. *Cognitive Neuropsychiatry*, 15, 118-144
- Perrin, D., Michaelian, K., Sant'Anna, A. (2020). The Phenomenology of Episodic Remembering is an Epistemic Feeling. *Frontiers in Psychology*, Vol. 11, pp. 1-14. <http://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.01531>
- Souchay, C., Isingrini, M., Espagnet, L. (2000). Aging, Episodic Memory Feeling-of-Knowing, and Frontal Functioning. *Neuropsychology*, vol. 14, n° 2, 299-309
- Souchay, C., Moulin, C. J., Clarys, D., Taconnat, L., and Isingrini, M. (2007). Diminished episodic memory awareness in older adults: evidence from feeling-of-knowing and recollection. *Conscious. Cogn.* 16, 769-784.
- Souchay, C., and Moulin, C. J. (2009). Memory and consciousness in Alzheimer's disease. *Curr. Alzheimer Res.* 6, 186-195.
- Tulving, E. (1985) "Memory and Consciousness", *Canadian Psychology/Psychologie Canadienne*, Vol. 26(1), pp. 1-12.
- Vignal, J. P., Maillard, L., McGonigal, A., Chauvel, P. (2007). The dreamy state: Hallucinations of autobiographic memory evoked by temporal lobe stimulations and seizures. *Brain*, 130, 88-99.
- Yonelinas, A. P. (2002). The nature of recollection and familiarity: a review of 30 years of research. *J. Mem. Lang.* 46, 441-517.